口語詩句５月総評　　龍　秀美　　20210615

　偶然ですが、今月は総評に取り上げた作者が一人二作ずつという結果になりました。短詩の場合、創作のモチベーションの高まりが集中することはより多くあるでしょうし、また、そんな時にはその作者のスタイルが強く出るように感じました。
　そのほか、十代の若い人の感性にひとつの傾向があるように思われました。比喩にせよ寓意にせよ、結論が開いているというか、訴えたいことを読み手の「好み」に任せるという感覚です。相手に参加させるとも言えるでしょうか。これはこれまでの世代が、結局は訴えたいことを表現するためにレトリックを使うというのとは違っているように思います。

遠ざかってゆく
人から発される熱気
渦中の直中
照りつける
光を、光とは。
作者　来栖　優　宮城県
――「遠ざかってゆく」のに「発される熱気」。「渦中の直中」に生まれる「光」。それらは何か。果たしてその先は。

木々は揺れ電車は過ぎて
木々は揺れ、予兆は意味を
成さないでいる
作者　松下　誠一　東京都
――繰り返されるフレーズは時間と共に変質していく。予兆になり、そして意味を成さない意味へと。

天井に嵌められている蛍光灯の

落下を思う授業の合間

作者　豊冨　瑞歩　茨城県

――どんなことも可能性としてゼロではない。不意に浮かぶ恐怖と、どこかでそれを望んでいるパラドックス。

しあわせの

二、三歩先にあるバナナ

作者　まちりこ　埼玉県

――飢えずにバナナが食べられるのはもちろん幸せである。しかし、「しあわせ」を中心点として二、三歩先か二、三歩前か圏外か。バナナの位置で幸せは変わるかも知れない。

骨は骨　煙は煙　父は父

作者　まちりこ　埼玉県

――骨、煙、父と名付けられる物は物質として変貌するが、意識も変貌に付いていくか。言い切りが力強い作品。

帝国を創る兆しも見せないで

リンゴの皮を剥いてる少女

作者　松下　誠一　東京都

――ここにも意味を成さない「兆し」。しかし、兆しはあらゆるものに変化する。リンゴの皮を剥く平安にも不安にも。

優しい人になどは

決してならぬよう

優しい人になどは

決してならぬように。

作者　来栖　優　宮城県

――実態の不明な「優しい人」と言われるもの。その曖昧な囲いからは早急に逃亡しなければならない。さり気ないゆえに強い繰り返しが「優しい人」の不気味さを際立たせる。

放課後を急ぐわたしの

しばらくは悩んでもいい

おにぎり売場

作者　豊冨　瑞歩　茨城県

――現代では「悩む」などという行為は「不要不急」かつ「非生産的」なのだ。おにぎりを悩んで選ぶという許されたわずかの隙間。

–ケンカをするな

腹が減るぞ–

ネズミ男の　この

言葉が好きだなぁ

作者　武中　義人　岡山県

――欲望に忠実かつ実際家であるネズミ男の価値観は、生きるというギリギリの一点で間違いがない。

ロウソクを

吹き消せば

時間の周りに

湖ができる

作者　武中　義人　岡山県

――ロウソクの火はことに時間と共にある。正しく刻まれている時間を不意に吹き消せば、行き場を失った時間の湖ができるだろう。アナログの刻む美しさ。